

中世記録地名の環境語彙分析

肥後国阿蘇郡湯浦郷の「山野境注文」を素材に

An Analysis of Environmental Vocabulary
in Place Names Recorded in the Middle Ages

春田直紀

はじめに

- ①史料の性格と先行研究
- ②山野境記載の提示
- ③中世湯浦郷の空間構成
- ④境界地名の語彙分析
- ⑤まとめ——生活空間と環境認識

【論文要旨】

史料に記録された地名は今までもに、歴史的景観を復原するための重要な手がかりとして活用されてきた。そのため、復原の鍵となる歴史地名に関心が集中する一方で、現地比定が困難な地名の活用は低調であったといわなければならない。しかし地名を、位置を示す符号としてのみ扱うのではなく、土地に対する認識の言語化ととらえ、その観点から地名の意味の成分分析を試みるならば、より多くの記録地名が有効に活用されることになる。とりわけ、自然環境に関する地名には、住民の環境に対する認識が深く浸透していたとみなすことができる。地名を手がかりとした環境認識の分析は、住民の生活に密着した小地名（小字・通称地名）を対象に進められてきたが、記録地名であっても地域的・数量的にまとまった地名群を扱うことができれば、地名の語彙分析を通して、特定の時代における住民の環境認識や環境利用の実態を探り出す手がかりは得られるはずである。

そこで本稿では、自然的要素の地名を多く収載し、地名相互の連関も把握しやすい肥後国阿蘇郡湯浦郷の「山野境注文」を基本史料として記録地名の語彙分析を進め、客体である環境を主体である中世の人間がどのように認識し、いかなる生活空間を構築していたかという課題に迫った。その結果、①中世湯浦郷の生活空間は、高低差約400mの阿蘇外輪山上と麓集落とを縦に結ぶ「大道」とそれを相互につなぐ「横道」とが動線となって構成されていたこと、②湯浦郷の住民は、土石流や水害を繰り返す地形環境のなかで、自然災害時の危険ポイントを体系的に認知し、集落立地や利用する土地の選択も行っていたことを明らかにするとともに、③自然的要素の地名においても中世と現在との懸隔は大きく、その背景にある外的な環境変動に加え、環境を認識する人間の内的な変化や、地名を整理する制度的・社会的枠組みの問題を考慮する必要があることを、最後に指摘した。